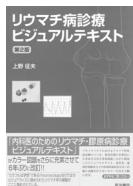


リウマチ病診療ビジュアルテキスト

第2版



著：上野 征夫

B5 頁416 2008年
 定価 9,975 円(本体 9,500 円+税 5%)
 ISBN [978-4-260-00445-9] 医学書院刊

今、至福の時を迎えている。週末のほぼ丸2日間を、上野征夫先生の単独著『リウマチ病診療ビジュアルテキスト(第2版)』の味読に割けているからだ。著者御本人から直々にいただいて数カ月にもなるのだが、書評のための通読のまとまった時間を捻出できなかったのには、生来の怠惰以外の理由もある。昨今の病院長にとっての二大課題、勤務医の安定雇用と医療事故対策に評者も思い切りとらわれているからである。言い訳はともかく、好調な売れ行きと聞くのは、誠に慶賀にたえない。

第2版の改正点の第1は、「あれ、結節性多発動脈炎は？ 顕微鏡的多発血管炎は？……」といった初版時の問いに対する回答である。つまり、血管炎の章の増設である。そのほかの大幅な追加項目として、血清反応陰性脊椎関節症、感染性関節炎、随伴性のリウマチなどがある。おかげで2倍近い厚さになっている。第2は、日進月歩の医学に見合った増補であり、リウマチ病の生物学的製剤などが挙げられる。第3は小さいことかもしれないが、膠原病という用語が一切除かれたことである。理由は、「強皮症以外、collagen disease にコラーゲンの異常は見られない」という米国で

の30年前の指摘に基づくとの由。なお、文部科学省からの「医学教育モデル・コア・カリキュラム—教育内容ガイドライン」(平成19年度改訂版)の索引には、リウマチ病はなく、膠原病や膠原病類縁疾患はある。第4に、顔写真に目隠しが入ったことである。第5の違いは、出来栄えには関係ないが、手書きではなく、ワープロが使われたことである。

初版から一貫した特徴の第1は、図や絵やカラー写真の豊富さである。紙の質も実に高く、定価も許容範囲である。特徴の第2は、簡潔明瞭で、歯切れがよい記述が継続されていることである。第3には、「リウマチ病の診断は、“病歴と身体診察”に90%以上頼っている」という著者の信念が、心地よい通奏低音になっていることである。診断推論の基本に“病歴と身体診察”を置く評者のような一般医には、練達の専門医の確信は実に心強い。

洛和会音羽病院では、何年にもわたり、東京在住の上野先生に月2回教育指導に来ていただいている。月に一度開かれる「京都GIMカンファレンス」の熱心な参加者でもある。招聘“大リーガー医”のこよなき話し相手になってもらっている。

日本人初の米国リウマチ専門医である上野先生は、留学から帰国後の30年間のほとんどずっと「フリーランスのコンサルタントリウマチ医」を貫かれている。医局講座制と完全に縁がなかったわけではないが、特定の医療機関における雑務や昇進とは無縁であった。「天から降るがごとく」教えを受けられた米国留学と帰国後の生涯現役の生き方が、本書を生み出す原動力となっている。「立ち去り型サボタージュ」に病む昨今の日本の病院勤務のあり様に、突き付けるものは重い。